



# 明石藩関連資料による「明石藩の世界」展：越前松平家・黒田家資料を中心に(フィールドリポート3)

釜須, 朱美

---

**(Citation)**

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 7:129-131

**(Issue Date)**

2015-12

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81009173>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009173>



## Field **3** Reports

### 明石藩関連資料による「明石藩の世界」展

——越前松平家・黒田家資料を中心に——

釜須 朱美

#### 一 はじめに

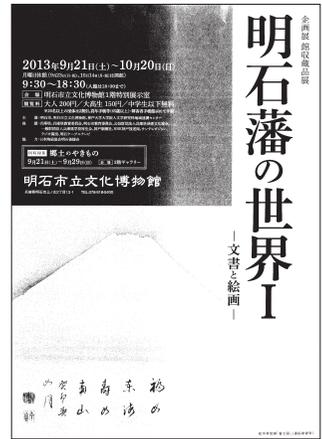
明石市立文化博物館（以下文博）は平成三年開館し明石市直営後、平成一九年に民間企業の指定管理者制度に移行、現在は神戸新聞事業社・神戸新聞地域創造・NHKプラネット共同事業体により運営している。文博が隣接している明石城は平成三一年には築城四〇〇年を迎えるが、その実情はよくわかっていない。それは明石藩に関する資料が第二次世界大戦の空襲などで焼失し、残っていないからとも言われている。そんな中、平成二四年に明石市に寄贈された旧明石藩主の越前松平家と明石藩士であった黒田家の資料は幕末の明石藩を知るうえで大変貴重なものである。これら文書をはじめ絵画、武器、陶磁器、生活用品など一七〇〇点もの資料は明石

市より神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター（以下連携センター）に調査研究、公開を委託された。文博は整理保管を担うと同時に、連携センター、明石市三者主催により平成二四年に速報展、平成二五年より企画展「明石藩の世界」展を開催している。

#### 二 「明石藩の世界」展

この企画展は地域連携センター木村修二氏を中心に展示計画を立て、同じ地域連携センター前田結城氏、明石市文化財係（以下明石市）、文博が連携しているが、ここからはこの展覧会の文博担当者として、昨年までの展覧会を少し振り返ろうと思う。

寄贈を受けた平成二四年は速報展として保存状態の良い資



「明石藩の世界I——文書と絵画——」チラシ

料を中心に展示を行ったが、平成二五年度からは企画展としてテーマを設定し展示することとなった。初回のテーマは「文書と絵画」、藩主松平家の系譜や黒田家の由緒、家老になった黒田長棟の記録、また長棟の息子長保の日記など古文書を中心に紹介した。また絵画では神戸大学大学院人文学研究科の橋本寛子氏に加わっていたが、松平齊宜が描いた「富士図」などを展示した。

私はこの年から文博の担当者として参加しているが、この年の四月に資料担当として文博に採用されたところで、まだ右も左もわからないまま四月末には第一回会議があった。しかし前年の速報展を新聞記事で見ていた程度の知識しかないなか、いきなりの企画会議では全くついていけない状況であった。そんな私の様子をみて地域連携センターの方々はずいぶん不安であつたらうと思う。企画展自体は前年からの計画に盛り込まれ、大筋の展示品も決まっていたが、展覧会は九月

と実働できる期間が正月四か月にもかかわらず詳細はこれくらいという状況であった。そのうえ全員が集まれる機会も月一程度と少ないが図録の発行を考えると待たなしの状況であった。また調査と公開をほぼ同時進行という部分もあり、特に古文書についてはこれから翻刻というものもあった。そういう訳で図録編集などの裏方であった私は原稿を取りまとめるのだが、締め切りはいつも過ぎて当たり前、そのうえ文章作成ソフトが地域連携センターは「太郎」、文博は「Word」と互換性の悪いもので悪戦苦闘であった。図録原稿を地域連携センターと明石市に校正をお願いして、それを取りまとめて印刷会社に連絡という作業だけでも地理的に離れていることもあり締め切りぎりぎりであった。展覧会メンバーが連日遅くまで論考執筆や古文書翻刻をし、図録も何とか展覧会には間に合い、また展示作業、講演会等も終わり初回の企画展「明石藩の世界I」は終了した。

二回目となる昨年には「藩士の日常」をテーマに黒田家の日常に焦点をあて、娘の結婚や長棟の葬儀に関する文書や生活に関するいろいろな記録を紹介した。この時は企画の段階で私も展示コーナーのひとつ「黒田家のあそび」を担当するように木村氏から提案された。当初、昨年の作業内容から考えて、とても無理だと思いつつ結局担当することとなり資料調査を始めた。「黒田家のあそび」では黒田家資料か



「明石藩の世界II——藩士の日常——」チラシ

ら江戸末期の絵双六、福笑い、十六むさしを取り上げた。いずれも懐かしく、また今では忘れられたりした遊びであるが、調査するほどに奥が深く、展覧会だけでは十分ではないと考え文博の研究紀要に発展した。また今回は外部の専門家に図録への寄稿と講演会をお願いすることになり、絵双六収集家山本正勝氏に依頼、講演会は残念ながら日程の都合で実現しなかったが図録に寄稿いただいた。

企画から展覧会までは昨年同様短期間であったので、作業的には厳しいものであったが平成二五年度より観覧者数も増え、なかにはリピーターもいらつしやつて成果が表れてきたのかと感じている。

今年度も一二月二三日と翌年一月三日にかけて三回目の「明石藩の世界」展を開催する。テーマは「藩主と藩士」。内容はまだまだこれからだが、昨年までの秋開催より少し遅くなったので、少し余裕をもってより充実した内容にしていけ

ればと思う。

### 三 おわりに

以上展覧会について述べてきたが、文博では資料の整理保管という重要な役目も持っている。整理保管が充実してこそ、展覧会も充実したものになると思うが、多岐にわたる多くの資料を適切に保管するには人員も予算も限られている中ではなかなか進まない。

文博は先述したとおり現在指定管理者によって運営管理されており、今期の契約は今年度で終了する。よって私が「明石藩の世界」展に係るのも今年度限りである。しかし来年度以降もこの展覧会は続いていくだろう。そしてこの展覧会をきっかけに明石市民をはじめ多くの人に明石の歴史・文化に興味を持ってもらいたい。

また築城四〇〇年に向けて明石市史編纂も地域連携センターを中心に進められているが、文博には他にも未整理の古文書が多数収蔵されている。松平、黒田家資料の調査研究とともにその古文書たちの調査が進むことを願う。そして、この機会を逃さず明石市からもアプローチできる人材を長い目を持って育ててほしい。